

エドゥアルド・デ・フィリップ 戯曲集1

イタリア会館・福岡・4725円



監修・訳者

ドリアーノ・

スリスさん

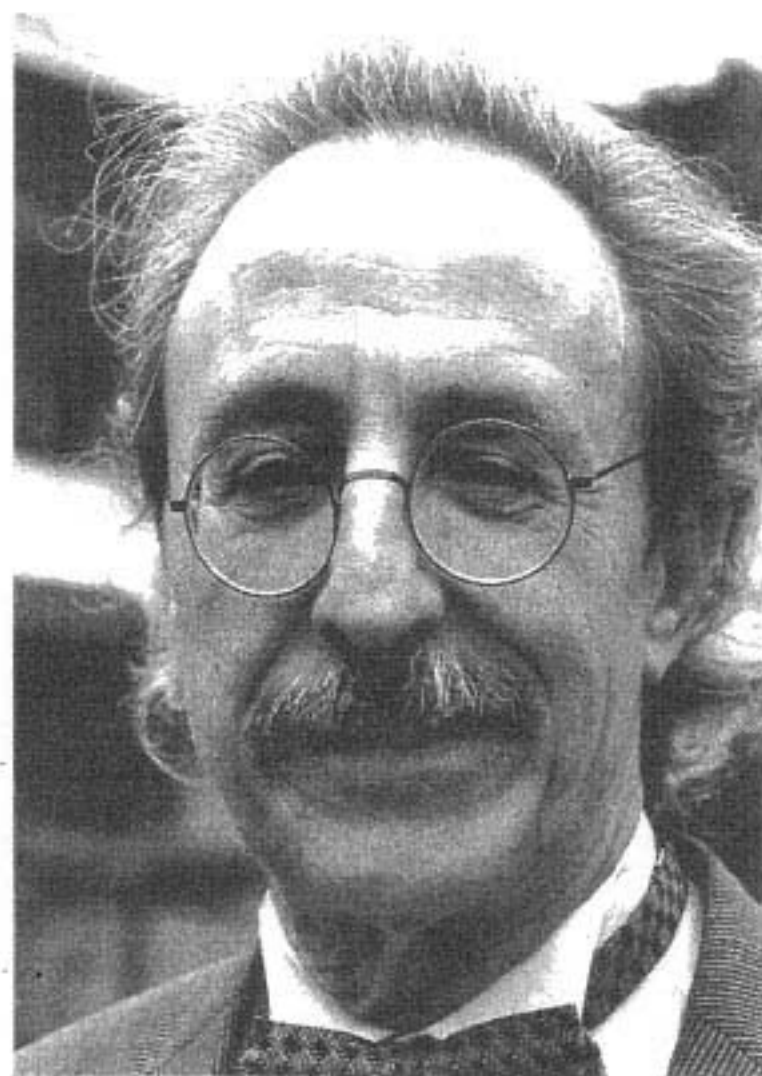
イタリアでは誰もが知る、エドゥアルド・デ・フィリップ(1900〜84年)。映画監督のフェデリコ・フェリーニやオーソン・ウェルズらに愛され、イタリア映画史にも影響を与えた劇作家だ。ウィットリオ・デ・シーカ監督作品「あゝ結婚」の原作者でもある。

初めての出会いはい
971年、ローマの劇

場で上演された「幽霊たち」だった。「演劇にはわざとらしさがつきものだと思っていた。だが、彼の作品はまったく違っていた。その日だけでなく、翌日もまた翌日も……。劇場に通い詰め、結局4回も見てしまいました」

「落語のような」とも言われる人間へのまなざし。出身地ナ

知られざるナポリの路地裏へ



かった。自国の文化を伝えるイタリア会館を運営しながら、いつか紹介したいと夢見てきた。

日本で初めての戯曲集は5巻完結の予定。第1巻には、「デ・プレトリー・ウィンチェンツォ」を収録。共訳の大西佳弥氏と、一語一語ニュアンスを確かめながら言葉を選んで完成させた。デ・プレトリーは、こそ泥の青年の名前。彼の恋を通して戦後の貧しい社会を描いている。

ポリの言葉を巧みに織り交ぜながら喜怒哀楽や義理人情を描き、テレビでの放送も手伝って多くの人々に親しまれてきた。

「例えば、直訳すると『試験はずっと続く』という意味の作品タイトルがあります。劇中で『試験に終わりはない』という意味で用いられ、今では慣用語のようになって浸透していま

す。そういう言葉がいくつもあります」。イタリアに生きる人々の生活から着想を得たセリフが、デ・フィリップを通してまた生活の中へと帰ってゆく。そんな幸福な関係があった。

自身はローマ育ち。妻となる日本女性と出会い74年来日した。意外にも、デ・フィリップは日本でまったく知られていな

「ナポリには対照的な二つのイメージがあります。世界遺産の観光地として人気がある一方、スリや暴力などでも知られます。このナポリのさまざまな表情を作品はよく伝えていきます。これをご覧になれば、エドゥアルドが手を握って、日本人が今まで知らなかったナポリの路地裏にさなってくれることでしょう」

(5月下旬刊行予定)
文と写真・高橋咲子

好きにな

澄川

①錦帯橋。山口
ある、五連のアー
木造橋です。故郷
れて岩国の工業学
た私は、この橋を
した。異なる素材
分け、美しく反る
の職人の英知が結
ます。1950年
風で流失した時の
られません。

後年、彫刻家と
を続けるうちに、
つ反りなど、素材
事にしたかと思
た。そして生まれ
彫刻のシリーズ「
かたち」。つまり
昔の光景に隠れ
す。「そり」と同
建築の柱や屋根に
ふくらみ「むくり

家メシ道場

給食系男子著(ディスカヴァー・トゥエンティワン・1050円)

チなど、誰もわざわざ教えてくれないような料理まで丁寧に手ほどきし
てほしい。

島に上る月 全八巻

与並岳生